

第二十八章 小春日 和

人生には不思議に慶事が重なったり、非運が次々と訪れたりする時期がある。大平の生涯もその例に洩れなかったが、大福体制の成立によつて党幹事長に就任してからは、身边に明るい話題が相次いだ。

まず昭和五十一年暮には、新居が完成した。東京都世田谷区瀬田一―二八―三の大平邸は、昭和四十九年一月に火事で焼失し、以来、大平家は最寄りの森村邸（瀬田一―二九―八）に借家住いを続けていたが、旧邸が建て直されたのである。大平夫妻は、それまで何度も住居が変わり、持家を持ったこともあった。だが、それらはみな他人の建てた家を手に入れたもので、自分たちで計画し、新築した家はこれが初めてであった。物に対する所有欲の強い大平ではなかったが、生涯で最初の自分の建てる家には少なからぬ関心があつたのである。大平は「子供たちはそれぞれ所帯をもつて独立するし、老人夫婦二人だけの住いをつくるのだ」と言っていたが、計画を進めるうちに次第に膨み、旧邸とほとんど変わらぬ大きさのものになった。

この機会に、庭の一部を削つて二男裕（古河電工勤務）・公子夫妻の家も出来上がり、大平邸の裏にあたる場所にはすでに女婿の森田一の家が建つていた。大平は子どもや孫に囲まれた生活をする幸福に恵まれたのである。ただ一人独身で気がかりであつた三男明（東京電力勤務）も、五十二年の五月には、大正製薬会長で参議院議員の上原正吉の孫娘吉子との縁談が整い、秋には挙式することになった。家族の身边もそれぞれ固まり、家庭的な安定と充実が目立つた。

逆転阻止に成功した参議院選挙後の臨時国会は七月二十五日に召集されたが、大平は、衆議院で九人の同僚議員とともに勤続二十五年を迎え、永年在職議員として表彰された。福田首相を含む表彰議員のほとんどが、昭和二十七年十月一日、独立後初の第二十五回総選挙で初当選してから連続当選を果たしてきた同期生たちであり、激動と復興の四半世紀を生きてきた人々であった。本会議における表彰式の後に、保利衆議院議長の祝福を受けるため議長サロンで記念写真が撮られたが、保利議長、福田首相夫妻、大平幹事長夫妻の集まった姿は一幅の華やかな絵となった。

そして、この頃には、すでに大平は、次期総理・総裁に擬せられており、その言動は、毎日のようにマスコミで報道されてきた。大平の人生には陽光がさんと降り注ぎ、不安の翳りは何一つないように見えた。

八月上旬に、大平はお国入りをした。参議院選挙に自分の秘書であった真鍋賢二を立て、現職の強敵、前川巨を降して勝利をおさめさせてもらったお礼と衆議院在職二十五年表彰の記念講演会をかねての帰郷である。八月の瀬戸内は風も少なく、油照りの暑い日々であったが、大平を迎えた地元は熱狂した。二十五年前、海のものとも山のものともわからぬ無名の新人大平正芳を担いで選挙戦を走り回った支持者たちの前に、堂々たる大政治家として大平が帰ってくるのである。地元支持者としては、誇らしくもあつたし、長年の労苦が酬われる思いでもあつた。しかも、香川から初の総理大臣を“という、ここ二十年来の支持者たちの夢が、単なる願望から手のとどく現実になろうとしていた。

大平の講演は、二十五年間の国民生活の向上や社会変化を具体的な数字をあげながら説明しつつ、この間になしとげた日本の業績を語り、世界の先進国に伍して進むべき日本の進路を示し、新たな決意で共に歩むことを訴える熱の入ったものであつた。

お国入りのあと、大平幹事長は数年ぶりに激務から解放され、僅かながら休息の時を与えられた。大平はこの機会に、昭和四十五年に出版した『巨擘芥考』以来の演説や講演、提言や随想を一冊の本にまとめることを思い立ち、多くの資料を持って箱根にこもつた。衆議院在職二十五年の記念の一つとするつもりであつたが、一つの人生の区切り、身辺整理の

一環でもあった。大平は、いわゆる政治家の日記らしいものはつけなかったが、文章を書くことは嫌いでではなく、また頼まれれば気やすく筆をとり、自らの心象や感懐を色紙の文字に託すことが多かった。『花紅柳緑』式の句は百を超えるほど記憶しており、揮毫依頼者の立場や人柄に応じて言葉の贈り物することを忘れなかった。それでも豊富な読書の中から心に触れる言葉があれば、丹念に手帳に書き止め、たえず名言の補充もしていた。その意味で、色紙にしたための句は大平のその時々的心境を如実に物語る記録であったと言うことができよう。(『回想録』資料編参照) 色紙の書き方は能書家で知られた故津島寿一蔵相に教えられたというが、無造作に書きあげるように見えても、ほとんど書き損ずるといふことはなかった。堂々たる体軀、一見魁偉な容貌に似ず、その筆致は繊細であり、書体は木簡後期の味わいのある独自のものを創りあげていた。この頃よく揮毫した句の中には、

山上在山山幾層(山上に山あり 山幾層)

波間在道道縦横(波間に道あり 道縦横)

真味是淡至人是常(真味は是れ淡 至人は是れ常)

不苦去日多只求失日少(去る日の多きを苦しまず、ただ失う日の少なきを求む)

といったものがある。

青年時代から宗教に傾斜していた大平の心には、無限なる神の高みへの憧憬の念と有限なる人間への愛惜の情とが深く刻みつけられていたのである。折にふれて『所詮人間のやることだから……』という感想をもらしているが、完全なものを強く求めながら、それ故にこそ不完全な人間への理解と同情を深めてきた心の遍歴は、大平の人生を貫く主要なモチーフではなかったろうか。折に触れ、こつした思いを記した文章をこの夏の休みの間にまとめようというのである。

箱根観光ホテルに旅装を解いた大平は、午前中は気のおけない旧友とゴルフを楽しみ、午後は珍しく昼寝を楽しんだり、持参した原稿に筆を入れたり、全く政治を離れた時間を味わっていた。自らに許した憩いの時は短かったが、それを解放と充電に当て、来し方への回顧と行く末に思いを回らせながら、孤独の時を楽しんだ。

こうして夏休みの前半を箱根で過した大平は、後半を軽井沢で休養し、八月三十日には、箱根で開催された自由民主党主催の第一回「夏季全国研修会」に出席して、『転換期における政治運営の指針』と題する基調講演を行った。大平はその中で、自由民主党についての彼自身の基本認識をこう述べている。

「自由民主党は……いわば最も人間くさい政党でもあったといえましょう。だから自由民主党という政党は、近代的な意味で目鼻立ちのよい政党とは決していえないし、クリーンで恰好のよい政党ともいえません。したがってまた国民の間には人気のある政党とはひい、いき目に見ても思えないのであります。しかし、わが国の戦後経営は、この政党が主役になって遂行され、まれに見る成功を収めたことは事実であります。また、戦後の経営が世界的に大きい試練に直面し、遂に戦後経営に落伍する国々が多い中であつてわが国は、経済のバランスとその自立の達成に成功しているが、それはとりもなおさず自由民主党の持つ対応力の強さを示しているものといえましょう。自由民主党はサラブレッドのような恰好のよさはありませんが、コッテ牛のような強靱な実行力もっている政党であるといえます。自由民主党は、その意味で、わが国がもっている一つの大きな公的財産であるといえるし、このような政党はつくるうとしてもそんなに手軽につくることはできるものではありません。」(『回想録』資料編参照)

この研修会における大平幹事長の講演や態度はマスコミを通じて『政権に自信』と報じられたが、事実、大平に、時としてあらわれるシャイな面は影を潜め、満々たる自信が溢れていた。

研修会の行事として、七、八百人の地方活動家の研修生との懇談パーティーが催されたが、その中での大平幹事長の人気は抜群で、即席の揮毫をねだるもの、並んで写真を撮りたいと希望するものが幾重にもむらがり、退場しようとして出口につくまでかなりの時間がかかった。

夏を終え、臨時国会を迎えても、大福体制の根幹に揺るぎは見えず、大平は一回り大きくなった信望を背に堂々と駒を進めていた。在職二十五年記念出版の作業は着々と進み、年末出版にこぎつける目途がついて、題名も『風塵雑俎』と決まった。

三男明と上原吉子との結婚式は、十一月四日、周囲の祝福のうちに、森永貞一郎日銀総裁夫妻の媒酌で行われた。大平は、この結婚式の引出物を自ら選び、日本地図と世界地図をセットとして参会者に贈った。

同じころ、大平は『日本経済新聞』の文化欄に「私の履歴書」という連載ものの筆をとることにした。大平は山岸一平記者の再三の依頼に対して「そのうち書くよ」と言うだけで諾否いずれともつかぬ返事をしてきたが、秋も深まってきた頃、「毎年、元旦からは大物に書いてもらうことになっており、来年は大平先生と決めて空けてあります」と言われ、「これではもう断ることはできない」と観念したのである。幹事長という激務、予算編成期という条件を考えれば、「私の履歴書」を書くのに決してふさわしい時期とは言えなかったが、大平が「私の履歴書」の筆をとる気になったのには、山岸記者の強い勧奨のほかにも、もう一つ理由があったように思われる。

年が明ければ自分の政治生活の運命をかけた総裁選挙という年になる。その結果がどうであれ、ここで一度自分の人生を振り返っておくことも必要だろうという思いが大平の心中に芽生えたのであろう。

「これは文字通り履歴書にすぎないもので、私の平凡な生涯を順を追って簡単に記録したものである。いわば私が歩いた山径の中、尾根をなすと覚しき節々を駆け足で追って行った点描ともいふべきものである。だから、その周辺に横たわる谷間の状況や径の起伏についての叙述は十分ではない。

……それにしても、顧みて私は、戦前、戦中、戦後、この空前にして絶後ともいふべき激動の時代を、よくも事無く生きながらえて今日を迎えることができたものだとの感慨を禁じ得ない。……その間、これという誇るべき成功は勿論なかったが、幸に致命的な失敗もなかったことを有難いと思っている。

ただ少壮の時代に学ぶことのみならず、少少ながらも悔まれてならない。せめてこれから本気で勉強し、多少なりとも『感書邀友、積徳邀天』の境を覗いて見たいと願っている。」

これが、昭和五十三年の元旦から三十回にわたって連載された大平正芳の「私の履歴書」が、その年の七月、同名の単行本として出版されたときのあとがきの一部である。過去を振り返り、自分の政治思想を述べ、これまでの自分の人生に

訣別し、新たな人生に向かって最後の備えをしている大平の姿が見えるようなこの頃であった。

ちょうど「私の履歴書」が連載されはじめた昭和五十三年正月の九日、高松高商時代の同級生の太田誠三郎が、大平邸を訪ねた折、大平は太田に向かって言った。

「俺もなあ、思わざる道に入り、幸いろいろなことさせてもらったよ。これからあとやるべきことは、一つしかないと思う。そのやるべきことも、せひにも自分で求めてやることじゃない。皆さんに「やれ」と推されてやることで、「やるな」とおっしゃるのであればやめるよ。でもその時は、ある先輩のように老いの鼻水をたらしながら、うるうると老醜をさらすようなことはしたくない。やれといわれるなら渾身の勇を奮って、個人の利益はもちろん、党の利益に煩わされることなく存分に良いことを成し遂げたい。それには及ばぬというのなら、この機会に公職を辞したい。おかげ様で子供たちも成人したし、老後の夫婦二人で何とか食っていける身にもなった。俺には今後やりたい別の道もあるので辞めたいと思う。その二つの道の決断が、今年の末頃と考えられる。だから今年は、俺の人生で最後の決断の年だと思っている。」

〔回想録「追想編」〕

大平のこのような心境は、参議院選挙後の夏頃から萌しはじめており、初秋の箱根での全国研修会の前後に幹事長秘書の安田正治は「足もとの明るいうちに政治家の足を洗い、好きな道をやるのだ」という大平の言葉を聞いている。安田によれば、大平の「やりたい別の道」とは、気の合う学者やジャーナリストなどを集めた研究所を主宰することであり、好きな思想や社会問題や外交、歴史に熱中する半ば学究の生活であった。「議員をやめても、ただ家にじっとしているのではつまらないじゃないか。研究所をやっていれば、若い後輩が相談に来て適切なアドバイスをしてやれるだろう……」、だから研究所をやるうというのである。それは、今日まで志に反して実現できなかった、もう一つの大平正芳の人生であった。

また、秘書の小国宏はこの頃、大平から「郷里の皆さんには長い間お世話になった。何か記念になるようなものを残したい。恩人の加藤藤太郎さんは、加藤奨学財団を残されている。今ある大平文庫を充実させることも一つの案だが、早く

考え方をまとめてくれ」と言われた。小国は、「政治家としてこれから大仕事をするので、その仕上げが終わってからでよいではありませんか」と言ったが、大平は不満気な様子で、その後もしばしば催促した、という。その考えは、今日、「財団法人大平正芳記念財団」の構想となって、関係者の間で準備が進められている。

総理・総裁を目前に、全党の信望を集める身となって、自らの人生を顧みる暇のできたとき、栄光の階段を登りつめた後の哀情を思い、いま自らの人生の上に訪れようとする老いを感じて、果たしえなかつた若き日の夢を切実に求めようとする心境は、大平正芳という人物の個性を考えると、いかにも自然なものと言えよう。しかしながらこれは、何も首相への道を断念することを意味するのではない。首相になる運命ならばそれもよし、ならざる運命ならば別の道もまたよし、とする自然態の人生計画であった。

十一月の三男明の結婚の日から、大平家は大平夫妻だけの家となった。だが、朝は午前七時前から、午後は十一時過ぎまで、よほどのことがない限り、大平邸には幹事長番の記者たちが詰めかけ、雑談し、情報交換し、自分の家のように振る舞う状態は変わらず、なかなか夫婦二人だけの時間がとれないのが実情であった。その頃、記者たちから寢室の模様について聞かれた大平は、「あの部屋だけは、いかに親しい諸君だからといって見せるわけにはいかんよ。あそこは、われわれ夫婦の神聖な城だからね」と冗談めかして断っている。

幹事長就任後間もなくの頃、自民党本部の幹事長室に志げ子夫人を呼んで、「私の仕事をしている場所をあなたに見てもらいたい」と自ら夫人を案内して回った大平でもあった。

大平は記者たちに、「僕はどんなに忙しい時でも何とか時間を都合して、少なくとも月に一回は夫婦二人だけで食事をする機会を持つようになっているのだ」とも語っている。大平は妻へのこうした気持を『日本経済新聞』十月十六日付の家庭婦人欄に、「ぼくのマドンナ」と題する小文で次のように表明している。大平の人生観、家庭観や私生活観を知る上で貴重な手がかりを与えるものと言えよう。(『回想録』資料編参照)

「……私と妻との生活は、結婚以来四十一年を超えた。それは平穩なものであった。妻も私も平凡な女であり、男である。しかし、マドンナはだれかという設問を前にして、私は私の妻の中に、いくつかの女性のもつ美德というものを感ずる。それは貧しいものではあるが、私にとってはかけがえのない貴いものである。

私は、まず妻に一貫して私と子供に対する真剣な献身を感じる。そしてそれは、結婚式の言葉ではないが、健やかなるときも、病めるときも、また 得意のときも失意のときも 変わることはなかった。献身というのは、自分のことより、対象のことを重くみて、その人のために自分の一部ではなく、その全部を捧げることである。そこには微塵の打算もなければ、見えのかけらも伴わない。

……子供をもつということは、女の大きい負担であるが、同時に大きい誇りでもある。子供を産むことは、女にとって最も手ごたえのある生きがいであり、最も誇り高き役割の一つである。子供をもった女の姿こそはマドンナの属性の中でも最高のものであろう。妻も幸いに四人の子供に恵まれた。そんなに健康でもないのによく産んでくれたものだ。子供たちも妻に対してよくなつていり、友達としてよく行動を共にしている。その情景は美しい。子供たちもそれぞれ家庭をもつようになり、今では老夫婦だけが取り残された格好になっているが、事あることに妻と子供たちは集まってだんらんする。そしていつも妻がその中心にすわっている。それは彼女にとつては最も得意な時のよつであつた。

親類、縁者、友人等とのつき合いの大部分は何と言つても妻の仕事である。つき合いの場は人生にとつてのオアシスである。そこには相手に対する尊敬と評価も大切であるが、相手に対する奉仕と親切心がなければならぬものである。短い人生で恵まれた機縁は、それがどんなに小さいものであつても大切にしなければならぬものである。人生はそこ以外にはなく、その機縁をどのように大切にしていかが、人生そのものであるとも言えるからである。

妻の役割は、この諸々の機縁の結び目を大切に保守し、これに絶えず水をやり、施肥することである。妻はこのことを面倒がらずにやってくれている。社会的地位の高低や、貧富の差などにより態度を変えることなくやってくれている。私は、このことから渴いた世の中に潤いを、騒々しい世の中に平穩を、とげとげしい世の中に和らぎをもたらすが、天が

女に期待している大切な役割のように思われてならない。「」。

土曜日の午後、仕事が終わって解放されるとき、「諸君ともしばしのお別れじゃ」と新聞記者や党職員におどけて見せながら、部屋を出る。学校から解放される小学生のようにつれしそうな大平幹事長は、とても六十八歳とは見えなかった。